俺とアニメと妄想と

ベルム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺とアニメと妄想と

【Ｎコード】
Ｎ２１３６Ｚ

【作者名】
ベルム

【あらすじ】
もしイッセーがアニメオタクだったら？そして、某世界を大いに盛り上げる団の団長みたいな能力を手に入れたら？これは作者の趣味、妄想、ご都合主義、矛盾、主人公マジ強過ぎワロタ、敵哀れオワタ、武器は拳とその他もろもろが含まれます。嫌いな人は要注意（笑）：ジャンルは学園・冒険・エロコメディ・オカルトです。

※はじめに（前書き）

アンケートにご協力してくれやがりました皆様ありがとうございました！
一応はこれのほかにも書いていくつもりです。

※はじめに

さあ、はじまりました！
駄作者ベルムの新作が！
待ちに待った人はいないと思いますが・・・いや、いない新作！

舞台は悪魔・天使・堕天使・龍が蔓延って・・・はいない世界！
主人公は駒王学園２年生の兵藤一誠！

何を隠そう！

『ハイスクールＤｘＤ』

の世界だ！

・・・コホン。
ちょっと調子に乗りました。
やっぱり駄作量産者にこのハイテンションは維持できません。
まあ、とりあえず関係ないことは置いといて

はい、ついに新作を書きます。
って言っても、前作から２ヶ月しかあいてませんがね。

でも、ここで大きな問題が発生しております。
前までの構成だったら、問題なく悪魔に転生できたのですが。
そう、前までの話の進め方だったら、転生できたんです！

でも、今の構成で行くと・・・。

ヤバイ。
ひっじょ〜〜にヤバイです。

一応転生というより、悪魔になることはできるのですが。
それがあまりにも強引で・・・。

強引でも良いからとりあえず書いてみようと思います。
文句は受け付けません。

覚醒は小学６年生（前書き）

原作開始まではかなり遠い・・・と思われるでございますです

覚醒は小学６年生

Ｓｉｄｅ：一誠

・・・上のＳｉｄｅ：～って、いらなくね？
俺一人なんだからさ！

・・・ゴホン。
おっす！
始めましてだな。
俺の名前は兵藤一誠、地元の学校に通う小学２年生だ！
趣味はゲームにラノベを読むこと。それと、アニメを見ることだ！
後、おっぱい。おっぱいはすばらしい。俺はおっぱいのために生きているといっても過言ではない。
アレすごいね。
見た瞬間、キュピーンと来た。そう某連邦のホワイト・デビルが宿敵を感じたときみたいにな！

おっと、話がずれたな。

俺には皆と違い、不思議な力がある。
・・・あ、べつに異常とか過負荷とかじゃないぜ？

俺に不思議な力があるとわかったのは、俺が小６になって間もないときだった。

そう、俺はいつもどおり放課後友達と遊んでいるときだった。
友達の一人が

「鈴宮ヒルハの鬱憤ってアニメ知ってる？」

と聞いてきたのだ。

俺はドラグ・ソボールぐらいしかアニメはみたことが無かったから

「俺は知らないよ」

と答えた。まあ、あんときはアニメとかにあまり興味が無かったからな。

その後、

「これ面白いから絶対見たほういいよ！」

と言われ、ＤＶＤＢｏｘ（全巻）を渡された。

どこから出した！？とか

何で持ってんの！？とか

野暮なことは聞かない。もともと不思議なやつだったから、今更って感じもしたしな。

とりあえず、その日はそこで解散となった。

俺は家に帰ってきても特にすることが無かったから、友達から渡されたアニメを見ようと思った。

俺の部屋には、小さいが一応テレビがあった。

もちろんブラウン管のあのでかいやつだ。

「じゃあ、見てみよっかな？」

と思い、Ｄｉｓｃ１を入れて再生ボタンを押した。

～～♪～～♪～～～～～♪～～～♪

軽快な音とともに、アニメーションが流れていく。
所謂『ＯＰ（オープニング）』だ。

「お、この音楽なかなかいいな」

俺が結構好きな部類に入るテンポだったので、始めからテンションが上がった。

「お？始まったか？」

そこから俺の運命を大きく変えるアニメが始まった。

「・・・おわった」

観終わってＤｉｓｃ１をＤＶＤプレイヤーから取り出す。
そして俺は――

「メッッッチャ面白いじゃん！これ！」

と、言いながらＤｉｓｃ２を入れた。
結局母さんが晩飯だと呼びに来るまで、夢中になってみてた。
母さん曰く、『あんなに集中している一誠は初めて見た』とのこと。
それって何気に俺のこと貶してね？と、思ったが、大人な俺はあえて何も言わなかった。

鈴宮ヒルハの鬱憤の内容は簡潔に言うと

主人公の男がヒロインのヒルハに振り回されながら仲間を増やしていき、ヒルハの妄想が生み出した敵を、ヒルハが創った超トンデモ兵器でやっつけていくというものだ。

特に俺が興奮したのがヒルハの能力『妄想したことが現実になる』だ。

あれは俺の魂を根本から揺さぶった。

そして事件は起こった。

俺は

「あの超兵器カッケー！」

と思いながら、自分が超兵器を使っている姿を想像・・・もとい“妄想”した。

そう“妄想”してしまったのだ。

そして、

いつの間にか、

手に、

重量感が・・・。

俺は超兵器らしき物を握っていた。

俺は超兵器らしき物をそっとベットに横たえて、ドアの前まで逃げた。

そっと置いたのは、落としたりして爆発するのを回避するため。

あの時を思い出すと『ナイス判断！』っていつも思う。

そして恐る恐る、近づいていき、ベッドの前まで行った。
気分は、１３階段の９段まで上がったキリストの気持ち。
・・・わかんない？
俺もわかんね！

・・・ゴホン。
んで、そのままいろんな角度から超兵器らしき物を観察した。
結果――

「これは・・・超兵器だな！うん！」

超兵器でした。

～～数分後～～

・・・とりあえず今はこの超兵器をどうするか考えなければ。
そう思った俺は、
超兵器が消えるように“想像”した。

・・・果たして、超兵器は消えなかった。

「やっぱりむりだった・・・」

俺は項垂れた。
この超兵器はどうすればいいんだろうか？
また出てきたらどうしよう？
など、不安が募り、腹が痛くなった。
そこで俺は『ハッ』っと思いついた。

ヒルハ達はどうやってこの超兵器を消していたんだ？と。
俺は、急いでインターネットで『鈴宮ヒルハの鬱憤』と検索した。
ヒルハ達によると、次元と次元の間に空間を創り、そこに保管しているらしい。
俺は、次元と次元の空間を創り、そこに保管する自分の姿を“妄想”した。

結果――

「き、消えたあああぁぁぁぁ・・・」

超兵器は消えた。
ここで俺は思った。
『俺、ヒルハと同じ能力があるんじゃね？』と。
早速、自分がドラグ・ソボールの主人公『空孫　悟』と同じスーパーベジタブル人になった姿を“妄想”した。

バチバチバチ

その瞬間、俺の体に電撃が走り、髪の毛が逆立つのを感じた。
そして俺は、

不覚にも涙を流してしまった。男泣きである。

「う、うぅ・・・」

その日俺はずっと泣いていた。
スーパーベジタブル人の姿で。

そこから俺の厳し・・・くもない修行（？）が始まった。

覚醒は小学6年生（後書き）

・・・ベジタブル人ってなんだ。

能力解析しよう！（前書き）

今回は能力を調べます。

イッセーの両親の呼び方は本来、お袋と親父ですが小６なんで母さん、父さんでいきます。

・・・テスト中だから地味にきつい。

能力解析しよう！

おっす！
おっぱいは全人類の共通の宝だと思っているイッセーだ。
前回はスーパーベジタブル人のままで泣いてしまい、危うく母さんにばれるところだった。
もう少し解除が遅かったら確実にばれてた。

ノックしてから入ってきて、っていってるのにいつもノックしないんだよ！
まったく、俺じゃなかったらキレていたところだぜ。
母さん、命拾いしたな！

っとと。
とりあえずこの話は置いといて、だ。

俺の能力が『妄想したことが現実になる』みたいなものということはわかったが、まだはっきりとわかったわけじゃない。もしかしたら、違うかもしれないし、合っているかもしれない。
とりあえず今は、自分の能力を確認することが今後の目標だ。
ということで俺の能力画なんであるか調べたいのだが・・・

はっきり言ってどうしたら良いかわからないっ！！

いや、結構マジで。
さっき

「俺が頭いい姿を妄想したら良いんじゃね？」

と思ったが、俺が頭いい姿なんて妄想できるはずもなく。
結果は惨敗。
何と勝負しているかは不明だがな！

だが、これだけはわかって欲しい。
俺はそこまでバカじゃないってことを！
計算の過程を省いて先生から注意されたことだってあるし、漢字はもともと好きだ！
だってなんか漢字で書くとかっこよくね？
ほら、空孫悟の必殺技でもある『ドラゴン波』も『ドラゴンは』じゃ締まらないだろ？
だから結構漢字の勉強は真面目にやっている。

でも、特にこれといってできる科目がない俺は、自分が頭がいいと思ったことは一度もない。
やっぱり妄想するには強いイメージが必要だからな。
う～ん・・・どうしよう・・・。

『イッセー！お風呂入っちゃいなさい！』
「はーい！」

とりあえず今はお風呂に入るぜ！

～～入浴中～～

ふう、さっぱりした。
やっぱり俺は風呂が好きだな。

でも、あんま入ってるとのぼせるから、そこらへんは見極める必要がある。

そして、
風呂上りの、
コーヒー牛乳は、
最ッッッッ高である。

「ぷは～」
「またイッセーったら。ほら、ひげがついてるわよ」
「ん、あんがと」

あ、両親との仲はいたって良好だ。
何でもこの歳あたりから反抗期なるものに入るというのだが、俺はその兆しさえない。
だって、別に何か不満があるわけどもないし？
反抗する理由が見つからん！

「お？父さん、それどんな映画？」

そう言って俺はテレビを指さす。

「ん？ああ、これか？」
「うん」
「これはな、ある軍人さんが戦闘機が墜落した時に前世の記憶がよみがえって、前世の未練を無くすために頑張るお話なんだ。もう何百年も前の記憶らしくてな。でも、最後には無事未練を無くすことができて、それがまた泣けるんだよ」
「へぇ～、面白そうだね」
「ああ、面白いぞ。これはシーズン２・・・また違う人のお話だけ

ど、大体同じだな」
「ふ～ん」
と、いいながら俺もソファーに座って父さんと一緒にテレビを見る。
～～鑑賞中～～
「うぅ・・・フランクは良く頑張った」
「ジェイソン・・・お前・・・漢だよ・・・漢の中の漢だよ！」
ううぅ～・・・。
ジェイソンが今まで一人で戦線維持をしていたフランクを助けるために敵の中に一人で特攻を仕掛けたのは泣けた。ジェイソン・・・お前のことは忘れないッ！
「・・・もうこんな時間か」
「・・・あ、ホントだ」
もう夜の１１時をまわっていた。
「じゃあ、そろそろ寝るか」
「わかった、おやすみなさい」
「おやすみ」
そう言って俺は二階に上がって入った。
～～２階～～
部屋に入って、すぐベッドにダイブした。

「前世の記憶、か・・・」

そう呟いて、もし自分がさっきの映画の主人公だったら、と妄想した。

そう、妄想してしまった。

その瞬間、頭に何かが走りぬける。

それと同時に、ズキリと頭に大きな痛みがはしる。

そして、『誰か』の記憶が脳内で再生される。

「な、なんだよ、これ？」

『・・・ちゃん・・・は、ど・・・いくの？』

「こ、この人、だ、誰だよ？」

『おーい・・・け！先輩・・・で・・・』

「ま、まさか、これが、お、俺の前世の記憶？」

『いや・・・！目を・・・てよ！・・・ちゃん！し・・・いやだ！』

そして、真っ赤に染まる視界。

だんだんとあたりが暗くなっていく。

そして最後に見たのは、泣きじゃくる女性の姿だった・・・。

・・・お、落ち着け。

こういうときこそ冷静に状況を判断するんだ。

孫子も

「敵を知り、己を知らば、百戦危うからず」
って言っている。

・・・孫子って誰だ？

・・・あれ？記憶が・・・混ざってる？

俺が知らない人がいる。
俺の知らない話がある。
俺の知らない知がある。

俺の知らない・・・

アニメがある！

・・・俺ってこんなキャラだっけか？

・・・ああ！もうじれったい！

「もう何でもかかってこいや！俺が知らない人を知っている？それがどうした。俺の知らない話がある？それがどうした！俺の知らない知がある？それがどうした！！俺は俺だ！それ以上でもそれ以下でもねぇ！」

ったく。
こんなことで混乱するなんて俺らしくないぜ。
・・・やべ、話し方が変わってやがる。

・・・ま、いっか。
これも含めて、俺だ。

「過去を否定してはいけない。　過去を否定することは自分を否定することになる」

って有名なミュージシャンも言っている。
だから俺はこの記憶を否定しないし、今の俺も否定しない。
俺にできるのはこれくらいしかないだろ。

・・・とりあえず記憶の整理、するか。

〜〜整理中〜〜

・・・どうやらこの記憶は俺とはまったく関係のないところらしいが、日本語だから、国内であるのは確かだ。
しかし、『ドラグ・ソボール』のようにこの記憶には『ドラゴンボール』なるものがある。
そのほかにもいろんなアニメや漫画、ゲームの記憶がある。
その中に『特定の人物の能力がわかる程度の能力』というものがあった。
と、いうことで早速使ってみる。

ＮＡＭＥ：兵藤　一誠
能力一覧：『２次元の能力を使える程度の能力』
『妄想したことがが現実になる程度の能力』
『スーパーベジタブル（サイヤ）人になれる程度の能力』
『特定の人物の能力がわかる程度の能力』
『赤龍帝の力を操る程度の能力』

・・・大体わかった。
たぶん『2次元の能力を使える程度の能力』で『妄想したことがが現実になる』能力を使ったってことか。んで、たぶん『2次元の能力を使える程度の能力』で発現した能力はこの【能力一覧】の中に出てくるってことだな。『妄想したことがが現実になる程度の能力』で妄想したこともこの【能力一覧】に載るとしたら、『超兵器を造る程度の能力』というものがないとおかしい。『スーパーベジタブル（サイヤ）人になれる程度の能力』も『2次元の能力を使える程度の能力』で発現したのだろう。昔、『ドラゴン波』を撃てるように練習したことがあったが、できなかった。たぶんそれは『技（業）』だったからだと思う。『2次元の能力を使える程度の能力』はあくまでも『能力』限定ってことなんだと思う。でも『妄想したことがが現実になる程度の能力』があるから、今妄想したらたぶん撃てる。後が怖いから撃たないけど。

でも、最後の『赤龍帝の力を操る程度の能力』がなんなのかいまいち予想できない。いや、一応予想はできる。たぶん、これも『2次元の能力を使える程度の能力』と同じように、俺に最初からあった能力だと思う。今まで使ったことないから、なんともいえないけど。

・・・改めて思うけど、すごい能力だな。
ちょうどいいことに、前世の記憶には“そっち”系の記憶がかなりあった。
特に『ファンタジー』と言われるジャンルのものが多い。
『北斗の拳』『とある魔術の禁書目録』『絶対可憐チルドレン』『Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ ｎｉｇｈｔ』『戯言』『アホリズム』『烈火の炎』『ワンピース』『東方ｐｒｏｊｅｃｔ』『ＮＡＲＵＴＯ』『ＢＬＥＡＣＨ』『めだかボックス』『ハイスクールＤＸＤ』ｅｔｃ．
・・・・

・・・これからが楽しみだぜ！

能力解析しよう！（後書き）

文句は受け付けないぜ！

有名なミュージシャンとは誰？

第一次夏休み計画！（前書き）

一誠

小６の夏休みを迎える

第一次夏休み計画！

おっす。
前回、所謂チート能力が発覚した場面を回想していた一誠だ。
能力がわかったのは４月中旬。
そして今は７月２３日。

そう！
７月の下旬と言えば俺たちにとってはまさにパラダイス！な時！
ＮＡ・ＴＵ・ＹＡ・ＳＵ・ＭＩ！！
ヒャホーーーーーー！！
英語で言うと
「Ｓｕｍｍｅｒ　Ｖａｃａｔｉｏｎ」
だ！

何でそんなことわかる？
それがな、俺の前世の人が所謂バグキャラでな。
天才を超えた大天才おも超える超天才だったってわけだ。

だから、アニメとか記憶もはっきりあるし、勉強の方も『フェルマーの最終定理』を２秒もあれば証明できる。
・・・え？
そんな短い時間だったら文字もろくに書けない、って？
ノンノンノン。俺はもう一般人じゃないのさ。
今の俺は通常時でも戦闘力１０００万は堅いね。だから、字を書く速度も光速だ。
たぶんだけど、スーパーベジタブル人、もといサイヤ人になったこ

とでこんな戦闘力になったと思う。
おかげで『力を抑える程度の能力』で全力で力を抑えていないと、
歩いただけで半径１０ｍはぶっ飛ぶと思う。

それはさておき。
夏休みは２４日からだ。

つまり、明日から夏休みってことだぜ！
やったね！

っとと。
とりあえず夏休みの計画をしっかり決めとかないと。

え～っと？
まず８月１３日からお盆（１５日）に向けて実家に帰るから空けとかないとな。

・・・あ！
それと７月２９日にニーディパークに行くって言ってたから空けとかないとな。
あとは・・・特にないな。
友達も親の実家に行くらしいし。
じゃあ、俺はこの能力でどこかに行くとしますかね。

・・・よし！
計画はこんなもんでいいか？

７月２４日
―

―宿題とかいろいろ終わらせる。
←
7月29日：ニーディパークに行く。
―
―能力で一人旅。
←
8月10日
―
―帰省期間
←
8月16日
―
―またまた一人旅。
←
8月26日：夏休み最終日
8月27日：学校再開

・・・ふっふっふ。
我ながら完璧な計画だぜ！
そうと決まれば、早速宿題に取り掛かるぜ！

〜〜勉強中〜〜

・・・終わった。
・・・・・おかしい。
こんなはずではなかった。
な、なぜだ！
なぜ勉強が1時間で終わるんだ！
おかしいだろ！おい！

・・・あ。
俺の頭脳とか肉体とかその他もろもろもう人外ってこと忘れてた・・・。

・・・ま、いっか。
早く終わってダメなもんなんてねぇぜ！
急がば回れ！だ！

・・・あれ？この四文字熟語、『急ぐんだったら、遠回りして行け！』って意味だったよな。
・・・じゃあ、ダメじゃん。
『近道は、大抵悪い道と決まっている』
って誰かも行っていたしな。

でも、早く終わったもんはしょうがないよな、うん。
つか、小学校の問題とか楽すぎて、寝ながらでも解ける。
結構マジで。

しょうがない。
明日は夢画とか絵のコンクールに出す絵とかを片付けてしまおう。
読書感想文もやらないとな。
もちろんラノベの読書感想文だ。
・・・あ。
俺の部屋にラノベとかないじゃん。
唯一あんのが
『ドラグ・ソボール』
の漫画だけだよ。
・・・明日買いに行こう。

・・・はぁ。
なんか今日は疲れたな。
寝るか？
そうだな。寝よう！
「おっやすみ～！」

第一次夏休み計画！（後書き）

短いけど気にしないで。

つか、計画はじめから崩壊してんじゃんｗｗ

Let's retrograde time!!（前書き）

ベルム特有！

無茶通し！※

※あらゆる無理難題を無茶苦茶に解決する
ある意味最強のごり押し。
一般・特殊防御貫通性能がついている。

Let's retrograde time!!

Today and A・P：7月24日　午後

・・・おっす。
昨日、特殊課題以外全部終わらせたイッセーだ。
もとい、夏休み初日の午前までに夏休み課題を全部終わらせたイッセーだ。

・・・はぁ。
さすがの俺でも、溜め息をつかざるを得ない。
考えてみろよ。
最初の一週間で全部終わらせる人がいれば、毎日少しづつこつこつ夏休み最終日にやる人もいる。
俺なんて最終日3日前からいっつもやってたぜ？

それが、それが、だ。

何で半日もたたないで終わるんだよっ！
おかしいだろっ！
今までの俺の苦労はなんだったんだよっ！

・・・はぁ。
終わったことをいつまでも愚痴愚痴言っててもしょうがないか。
俺は過去を糧にして、前に進む男だ！
ただ只管に愚直に前に進み続ける！
どんな壁や闇があったとしても、すべてぶち壊す！
それしか今の俺にはできない！

・・・と、かっこいいことを言ってみたものの。
さて、ホント、どうするか・・・。

・・・ん？
そういえば、前世の記憶の中に『ドラえもん』ってのがあったな。
こっちの世界にも『シシのすけ』ってやつがあるけど、それとなんかにてたような気がする。
でも、あっちは『タイムマシン』とかいうやつで、昔や未来にいけるらしい。
未来に行って宝くじの番号見てきて、帰ってきて宝くじやったら、1等普通に出せるんじゃね？
と、思った俺は悪くないと思う。
人間なのだから。

・・・いいこと思いついたぞ。
『タイムマシン』を使って、時間旅行なんてどうだ！
・・・やっべ。
これ、いける！
とりあえず俺の机の引き出しがワープホールにつながるようにして、中に『タイムマシン』がある様子を妄想する。

「お、おおおおぉぉぉぉ・・・・・・」

繋がった！これでいつでも好きな時代に飛ぶことができるぜ！

「早速・・・いきますか！・・・とう！」

スタッ

搭乗完了！準備万端！

「まずはどの時代に行くかだな」

今日は近場で我慢するか？

・・・いや！男たるもの、常に大きくあれ！

ってことで、適当に５０００年前で！

ギュイーン・・・ヒュン！

・・・あれ？『タイムマシン』ってこんなに速かったっけ？

〜〜移動中〜〜

到着！

・・・って、ここどこだ？

周りを見渡しても、森とクレーターがあるだけで・・・。

「って、クレーター！？」

おいおいおい！なんでクレーターがあるんだよ？

ここは月か？

・・・いや、それはないな。宇宙に月がちゃんとある。

ってことは、だ。

ここで何らかの戦闘があったんだろうな。

でも、こんなでっかいクレーターができるなんて・・・。
どこの人外さんかは知らないが、あまりここにいるのはよろしく無さそうだな。

「さっさと移動ｓ・・・ん？あれは・・・馬？」

森の入り口にもたれかかる様にして、馬（と言っても、３０ｃｍぐらい）がいた。
怪我をしているようで、動けないようだ。

「う～ん、ここで見捨てるってのは・・・ないよな～」

うん、ここで見捨てたら後味悪いし。
何より男が廃る！
男は常に優しく、親切であれ！
それが俺の紳士道第三条だ！

と、言うことで

「どれどれ、どんな怪我を・・・っ！」

全身に擦り傷があり、右足と右肩、心臓に近い部分に刺し傷があった。
血を流しすぎたのか、体温は下がり、もう虫の息だ。
素人の俺から見ても、一目で重体だということがわかった。

「これは・・・ひどいな・・・」

そう呟いたとき、馬が目を開けて俺を見てきた。

その目にあったのは『諦め』だった。

「そんな目・・・するな！絶対に助けてやるから！それまで、生きろっ！」

そう叫んで、急いで回復系の能力や技を探す。

・・・ない。

・・・これは・・・だめだ！

・・・くそっ！・・・ん？

「聖母の微笑み（トワイライト・ヒーリング）・・・？」

これだ。

これがあれば助けられる！

使い方は・・・わかるっ！

「うおおおおおおおっっっっ！！！！治れっ！！！」

そう叫びながら俺は馬に手をかざす。

そこから淡い緑色の光が漏れ出し、次第に馬の身体全体を包んでいく。

そして見た限り傷が完全に塞がった。

「ふぅ・・・これで一応は大丈夫・・・じゃないな」

聖母の微笑みはどんな傷であっても治せるが、失ったものは治せない。

つまり、今この馬は傷は塞がっているが、体力もほとんどないし、常時貧血状態ってことだ。

そこで！

「貧血で困っている貴方！貴方にはこの『増血剤』なんてイカがでしょう！」（ＣＶ：某通販会社社長さん）

と、いうことで最近やってた通販番組のマネをしながら、増血剤が手の中にあるように妄想する。

するとどうでしょう！

一瞬にして手の中に増血剤が！

「と、いうことで、はい！これ飲んでくれ！」

そう言って俺は馬に増血剤を渡す。

なんとなく俺の言葉を理解してくれそうだったから、とりあえず言ってみた。

「・・・ひひぃ・・・ぶるぅ・・・」

パク

・・・か、くぁいい。

食べ方に萌えてしまったのは、仕方ないだろう。

もともと俺は動物があまり好きではないが、今ので好きになった・・・様な気がする。

「後は・・・毛布！」

体温を上げないと！

と思った俺は、フッカフカでぬっくぬくの布団を妄想する。

寒い日の寝起きの布団・・・みたいな。

「よしっ・・・俺も寒いし一緒に入るか・・・」

そう言って俺は馬を抱きかかえながら、一緒に布団に入った。

あ～ヌクい。
ヌクいぞ～。

「ふぁ～あぁ。眠くなってきたな・・・寝るか」

と言うことで

「おやすみ～」
「ふぅ・・・ぶるぅ・・・」

そう言って俺たちは眠りについた。
馬はどうか知らんけど・・・。

Let's retrograde time!!（後書き）

可愛いと書こうとしたら、くぁいいにいつの間にかなってたからそのままにした。
後悔も反省もない！

大嘘吐きで治してもよかったけど、それは最終手段にしてやっぱファンタジーって言ったらこっちだと思うんで。

馬の正体は・・・・え？（前書き）

超・展・開！☆

馬の正体は・・・え？

Ｔｏｄａｙ　ａｎｄ　Ａ・Ｐ：７月２４日　午後
Ｓｉｄｅ：イッセー

・・・すぅ～・・・すぅ～・・・んぃ。

「・・・んぅ～。・・・よく寝た」

おっす。
寝起きでテンションが低い一誠だ。
前世の俺も朝は弱かったらしく、朝は死ぬほど機嫌が悪いらしい。
さすがに俺はここまで悪くない。
ただ、テンションが低くて、テンションが上がりにくいだけだぜ。

「・・・すぅ・・・すぃ・・・」

・・・俺はあの後、馬と一緒に寝た。
馬と寝るってどうよ？
と、思うやつがいるかもしれないが、抱きかかえたときの気分は小型犬のそれだ。
なんか、毛が柔らかかった。
俺の馬のイメージでは、もっとごわごわしている感じだったから、驚いた。

そして今、俺は起きたわけだ。
当然、馬が俺の腕の中にいるはずなんだ。
いるはずなんだが。

「なんで俺がキレイなおねーさんの腕の中にいんの！？」
「んぅ？・・・んんんわぁ～～～はぁぁぁ・・・」

あ、起きた。
とりあえず、何で俺のこと抱きかかえているか聞いてみるか？
・・・でもな～。
いきなり聞くのってなんか失礼だよな？

・・・うん、失礼だな。
とりあえず自己紹介から良くか？
・・・そうしようか。

「んん？」
「あ、はじめまして」
「あ、はい、はじめまして」
「兵藤一誠っていいます。貴女は？」
「これはご丁寧にどうも。私の名前はゼクリウスです」
「ゼクリウスさん・・・ですか。・・・・・・ゼクリウスウウウウウウウウ！！？？」

はい、まさかの名前で驚いてしまいました。
ゼクリウスってのは、俺が昔考えたキャラクターで、全能の神様です。
もしかして、あの妄想が現実になった？
いやいやいや、待てよ？
もしかしたら、名前が同じってだけで、普通の人（ここにいる時点で十分普通じゃないと思うけど）かもしれない。

「えっと、どうかしましたか？」
「いや、ゼクリウスって・・・貴女が神か」

「はい、そうですよ。よくわかりましたね」
やっぱり、同名ってだけ・・・じゃないですね、はい。
・・・神様か～。
・・・どうしようか？
「あ！」
ビクッ↑イッセーが驚いたときの擬音
「な、なんですか？」
「えっと、さっきはありがとうございました」
「え？・・・え～っと、初対面ですよね？」
「いえ？」
「えええ～？・・・どこで会いました？」
俺にこんなキレイなおねーさんの知り合いはいないし、そもそもこの時代に来てから半日も経ってないぜ？つか、人にすらあってない。
あった、って言うより、見つけたのはあの馬だけ。
・・・そういえば馬どこ行った？
さっきからなんか足りないと思ったら、あの馬がいないんだよ！
ってことに今気がついた。
・・・まさか！
「もしかして、ですよ？もしかして貴女は・・・お馬さん？」
「はい♪」
Ｏｈ　ｍｙ　Ｇｏｄ！
なんてこった！

・・・ルー〇柴のマネじゃないよ？

「・・・怪我はもう大丈夫ですか？」

「はい♪貴方のおかげで傷跡すら残っていません♪貴方は私の命の恩人です」

「は、はぁ・・・」

なぜか、神様の命の恩人になってしまった。

誰がこんな展開を予想できただろうか、いや、できない。

というか

「天界に戻らなくいいんですか？」

「・・・はい。私はもう助からないと諦め、天使たちに後を任せてきた身。いまさら戻ることなどできないです。・・・それに今戻ったらかっこ悪いじゃないですか」

最後本音でたな、神よ。

・・・ん？

「じゃあ、何で馬になんかなってたんですか？」

「いや～・・・なんとなく？ですかね？あはは、まあ、細かいことは気にしないでください。あ、あと、敬語じゃなくて良いですよ？」

「・・・わかった」

まあ、神様も言ってることだしいっか。神様も敬語だけど、たぶんこれがデフォなんだろうな。

まあ、でも、俺も細かいことは気にしない性格だし。気にしないでおこう。

それはそうとして。

「これからどうすんの？」
「ん～・・・貴「イッセーでいいよ」・・・イッセーはどうするんですか？」
「・・・俺は適当にこの時代を旅するつもりだけど」
「じゃあ、私もついて行っていいですか？」
「・・・まあ、いいけど」
「やった♪」

うん、どうしようか。
なんかいつの間にか神様が俺の旅に同行することになった。

「じゃあ、神ｓ「ゼスって呼んでください♪」・・・なんでゼス？」
「最初と最後とってみました」
「・・・じゃあ、ゼス。どこか行きたい所とかあるか？」
「ん～、そうですね・・・特にありま・・・あ」
「？どうした？」
「プルテミン神殿に行きたいです」
「・・・それはどこにあるんだ？」
「あ、じゃあ、私が案内しますよ！」

そう言って、ゼスが立ち上がった。
・・・え？
今まで座ってたのかって？
あの体勢のまま・・・ではないけど、向かい合わせで座ってたぞ。

「それでは行きましょう！」

そうゼスが言った瞬間、ゼスの身体を光が包みこんだ。

「っく！」

あまりに強い光だったので、眼を瞑ってしまった。

光が収まり、眼を開けてみると――

白く輝く白銀のロザリオが宙に浮いていた。

ええぇぇぇぇ～～・・・・・・。

馬の正体は・・・・え？（後書き）

能力解析の一部を修正

神殿と言うよりもはや・・・（前書き）

題名はわざとです。

神殿と言うよりもはや・・・

Ｔｏｄａｙ　ａｎｄ　Ａ・Ｐ：７月２４日　午後
Ｓｉｄｅ：イッセー

『さ、いきますよ』
「いやいやいや！ちょっと待とうぜ？」
『？どうかしたんですか？』
「どうかしたんですか、って・・・。もしかしてこのロザリオ、ゼスか？」
『あ、はい。そうです♪驚きましたか？』
「うん、まあ、驚いた」

変身能力あるとか・・・どこの絶対可憐な看護婦さんだ。
まあ、俺もやろうと思えばできるけど。
今はその必要はないとみた！

「・・・じゃ、いこうか。案内よろしく」
『はい、いきましょう』

・・・・・・・・・・
・・・・・・・・
・・・

「あれ？いかないの？」
『え？』
「え？」
『ナニそれこわい』

どうしてその言葉を知っているかは知らないが、俺は突っ込まない。
突っ込まないぞ～！絶対。

・・・もしかして。

「自分で動けない、とか言うつもりじゃないですよね、ゼスさん」
『ご名答です！イッセー！・・・と、いうことで運んでください』
「・・・何でロザリオになったし」
『だって、そのままの姿だったら、天使達にばれるかもしれないじゃないですか』

ばれたくないってのはさっき聞いたけどさ、

「動物になればよかったくね？」
『歩幅が合いません』
「俺があわせて歩けば『歩幅が合いません』・・・」

・・・こいつぁ、意地でも動物の姿にならない気だな？

・・・はぁ、こんなことで時間潰すのももったいないし、妥協するか。

「わかったわかった。そのまんまで良いから」
『わかればいいんですよ、わかれば（・・・）』
「・・・首にかければ良いのか？」
『そうですね、それがジェネラルでしょう』

ジェネラル。
それは、ある格闘ゲームのラスボスの名前。

ジェネラル。
それは、名人にでさえ「気合で何とか・・・」と言わせるチートキャラ。

・・・なんか変な電波受信しちまった。

「じゃあ、かけるぞ」
『はい』

そう言ってこら俺は首にロザリオ（長いからこれからはぜすと表記）をかけた。
心なしか強くなった気がする。

『神様の加護が付きますから当たり前です』

へぇ～・・・そうなんんだ。
かけてるだけで、加護付くとかどこの世界の魔法具だ。

『魔法具と言うより、神具ですね』

あ、たしかに。
と、いうより、

「心読むなっ！」
『仕方ないじゃないですか。そういう仕様なんですよ』
「ああ、それなら仕方がな・・・くないっ！」
『まあまあ、発声しないで会話できるんですから良いじゃないですか』
「まあ、そうだけど・・・」
『それに私の声はイッセー以外に聞こえませんので、一人でしゃべ

っているイタイ子に思われますよ』
「うっ・・・それはやだな」
イタイ子にはなりたくないな。
ここも妥協するしかないか・・・。
「うん、なんかもういろいろ吹っ切れたわ。と、いうことで案内よろしく」
『おまかせください！』
と言うことで移動開始！

～～移動中～～

『着きました♪』
「・・・・・・」
今の俺の様子を漢字二字で表すとしたら、唖然。
着いたところは神殿と言うよりは、
『宮殿』
この二字がお似合いだった。
『早速入りましょう！』
「・・・入っていいの？」

『もちろんですよ♪』
「・・・わかった」

とりあえず中に入ってみることにした。
嫌な予感・・・とは違う変な予感がする。
そう、また何か厄介ごとが増える、そんな予感。

―神殿（？）内―

『こっちです』
「・・・」

そこには、なにやら幾何学みたいな紋様の魔方陣？があった。
中央には台があり、その上に普通じゃない指輪があった。

そう、“普通じゃない”。
これ重要。

「なにあの指輪」
『えーっと、封印の指輪？』
「なぜ疑問系！？」

・・・どうやら封印の指輪？らしい。
あんな見た目だ。
さぞかし“普通じゃない”モノが封印されているんだろうことがわかる。
わかりすぎて困るぐらいに。

『じゃ、封印解きますね』

「おう・・・って、まてまてまて！」
『？なんですか？』
「なんですか？、じゃねぇよ！なんだその『あ、コーヒー淹れますね』みたいな軽いかんじで封印解こうとしてんだよっ！？」
『え？普通じゃないんですか？』
「お前の普通がこわいっ！！」

ハァハァハァ・・・。
思わず大声で突っ込んじまった。
突っ込まないって決めたのに・・・。

・・・終わったことをうじうじ言っても仕方ない。
とりあえず、今やることは、

「・・・で？その指輪には何が封印してあるんだ？」
『魔王ですけど？』
「・・・どれに？」
『全部です♪』

・・・魔王様４名様ご招待～。

これは死亡フラグか何かなのか？
そうとしか思えん。
マジでガクブル。
震えが止まんないよ！

・・・なんかもう疲れた。

神殿と言うよりもはや・・・（後書き）

gd gdだぜ！

書いてたら、いつの間にか寝てて、構想がぶっ飛んで書くのをやめようと思った今日この頃。

ホントどうしようか・・・。

封印されし魔おうサマ（前書き）

題名はわざとです。

封印されし魔おうサマ

Ｔｏｄａｙ　ａｎｄ　Ａ・Ｐ：７月２４日　午後
Ｓｉｄｅ：イッセー

『～～～。～～・・・。～～～～』
「・・・」

おっす。
頗る元気で暇なイッセーだ。
今、ゼスは封印をといている途中だ。
俺はただ待っているだけ。
ひっじょ～に暇だ。
今、初めてゼスがいてよかったと思っている。

『っ！・・・～～～。～～』

・・・いま、詠唱？が一瞬止まった気がするのは気のせいだ。
そう、俺の気のせい。
じゃないと、やってられない。
ゼスの仕様を忘れてて、恥ずかしい思いをしているわけではない。
・・・そう、思いたい。

『～～～♪～～！・・・ふぅ、一応終わりました』
「お？一応？」
『はい。後はこの魔方陣にイッセーの魔力を流すだけです』
「え？何で俺のなの？」
『私は神であり、封印されているものとは相対する存在。故に封印することはできても、私の魔力では解けません』

「ふ～ん」
『それに、この者達より多くの魔力で解かないといけませんので、私には端から無理です』
「え？足りないのか？」
『はい、ちょっとだけ』
「じゃあ、俺の魔力は足りるの？」
『いいえ』
「え？」

いやいや。
何で魔力足りないのに俺の魔力流し込ませようとしたし。
おかしいでしょ、絶対。

『いえ、イッセーなら何とかしてくれそうだったので』
「何とか、って・・・。つか、そもそも俺、魔力知らないぞ」
『え？』
「え？」
『・・・よく生きてこれましたね』

まあ、俺の生活では魔力なんて使わなかったしな。
でもこの時代、というより、神様にとっては普通のことなんだろうか？
やっぱり。

『そうですね。魔力が使えないと、そもそも天使にすらなれません』
「へぇ～。・・・で？どうすんだ？」
『じゃあ、まずイッセーには魔力を感じてもらいます』
「おk、わかった」

そして、ロザリオから淡い青色の光が漏れ出す。

俺は一瞬で理解した。

『これが魔力』

と、いうことを。

『これが魔力です。わかりましたか？』

「ああ、問題ない」

『じゃあ、次は体内にある魔力を探してください』

「おｋ」

と、いうことで体内にある魔力を探してみる。

さっき感じた魔力と同じ気配を持つものを探す。

・・・あった。

あった、けど――

「少なっ！？」

『そうですね。ぶっちゃけ子供の方が多いです』

「肯定すんのかよっ！」

・・・ムカつきました。

いいよ。

こうなったら、あれを使うしかない。

「・・・くっくっく」

『？どうかしましたか？』

「ゼス、さっきの言葉、撤回してもらうぜ？」

そして俺は妄想した。

常時魔力が駄々漏れになるくらい多くなった俺の姿を。

そして変化がおとずれる。

まず初めに神殿の床に転がっている小石が浮き始める。
続いて、俺の周りに魔力の膜ができる。今も拡大中だ。
そして、神殿全体が揺れ始める。
揺れが大きくなり、柱に亀裂が入る。

「あ、やべ、やりすぎた」
『・・・っは！イ、イッセー！お、抑えてください』
「ごっめん、今抑える」

罪な口の人達の一族の『武器職人』に『魔道具職人』に捻じ曲げて
『魔封じの指輪』を作り、右手の人差し指に嵌める。
そうしたら、さっきまでの様子が嘘のように静かになる。

「ふい～・・・。危なかった」
『・・・ッハ！イ、イッセー！その指輪はなんですか！』
「ん？これか？」

そう言って右手の人差し指が見えるように前に出す。
飾りはなく、一見普通のシルバーリング。

『ですです』
「これは『魔封じの指輪』って言って、装備者の魔力を完全に封印
するものだぜ。まあ、今さっき創ったばっかりだけど」
『・・・魔法具・・・ですか？』
「まあ、そうだな」
『・・・』

どうしたんだ？

ゼスの奴、急に静かになったぞ？
・・・ん？
待てよ？
何か忘れている。
何だっけ・・・？

・・・神殿・・・魔方陣・・・“普通じゃない”指輪・・・

「・・・あ！魔王！」

そうだよ！
魔王が封印されている指輪のことほったらかしじゃん！
ゼスは・・・

『・・・』

さっきから黙ったまんまだし。

確か、この魔法陣に魔力流せばいいんだよな？
・・・よし！
やってみるか。

と、いうことで、今一度『魔封じの指輪』をはずす。
もちろん、外に漏れないように頑張って封じ込めるのを忘れない。
そして、魔方陣に魔力を、這わせるようにありったけ流し込む。

ピカッ！

（魔方陣が光りだしたってことは、成功したのか？）
そんなことを思いながら、『魔封じの指輪』を嵌めなおす。

そして

「・・・うむ、久方ぶりの空気じゃな」

「そうね～、でも、まだ封印されてから１０年も経ってない気がするわ」

「その予感は正しい。なぜなら、俺が日付を数えて、今日は封印されてから６７２日目だからなのだ」

「うわ～、シャハパはまたそんなことしてたの？」

なにやら、騒がしい男女が４人？現れた。

・・・なんか軽いな。

封印されし魔おうサマ（後書き）

「シャハパ」の由来がわかる人はすごい。

ヒントはアジュカ・ベルゼブブの名前の由来。

魔王は眷属？（前書き）

題名でもはやネタばれ

魔王は眷属？

Ｔｏｄａｙ　ａｎｄ　Ａ・Ｐ：７月２４日　午後
Ｓｉｄｅ：イッセー

おっす。
魔王の封印をといたイッセーだ。
魔王は何か軽いと言うことがわかった。
俺の想像ではもっと、こう、威厳があるって言うかなんていうか・・・。

とにかく、角があって、でっかくて、黒いモノを想像していたんだ。
ところが。
ところが、だ。

実際はどうだろう。
ある者は見た目青年なのに、ジジ口調。
筋肉がまったくと言って良いほど見られないが、雰囲気や目付きは熟練者のそれだ。

ある者は美人でグラマラスなお方。
あの胸に顔を埋めたいと思ったのは仕方ないことだと思う。あと、揉んでもみたいな。

ある者は眼の下に大きな隈があり、元気がほとんど見られない。
だが、その眼にはしっかりとした意思が宿っており、常に周りの情報を集めている。

ある者は常に人懐っこそうな笑顔を浮かべている。
一見華奢だが、服の隙間からのぞく腕や足は極限まで絞り込んだ筋肉だとわかる。

それに、何も知らない人が街中で遭遇したら、モノすっごい美男美女が４人歩いている。
ぐらいの感想しか持たないだろう。
魔王だが魔王らしくない。
『実は人間です♪』とか言われたら信じてしまいそうだ。
ただ、違うとすれば、それはゼスには及ばないが膨大な魔力を有していると言うことか。
４人？合わせたらゼスを軽く凌駕する。
まあ、俺が全力開放したときには及ばないが。

「貴方たちが・・・魔王か？」
「いかにも。我等が魔王じゃ」
「ね～。そのジジ口調どうにかならないの？それがなかったらいい男なのに」
「生憎、妻以外に素の口調で話すことはない。お前にはわかるまい」
「はいはい。独り身の私にはどうせわからないことですよ～だ」
「二人とも喧嘩しないで、ね？仲良く仲良く」
「ふむ、今回もフラロエが負けたか。いつものことだな」

・・・やっぱ軽ェ・・・。
ねぇ、俺どうすればいいと思う？
とりあえず自己紹介しておく？
そうするか？
でも、何か前も同じくだりをやったような気がしないでもない。

・・・自己紹介しよう。

「あ～・・・ちょっといいか？」
「む？なんじゃ？」
「俺の名前は兵藤一誠。貴方たちの名前を教えてもらってもいいか？」
「おお、これはすまなんだ。我はリーヒイロ・ルシファーだ」
「私はフラロエ・レヴィアタンよ。可愛い坊やね」
「俺はシャハパ・ベルゼブブ。なかなか興味深いものを持っているようだな」
「僕はクスジール・アスモデウスだよ。よろしくね」

・・・全員の名前聞いたけど、何か覚えにくい名前ばかりだな。
ただ、名前で共通するものがあったから、俺は覚えやすかった。

つか、シャハパさんが怖い。
何か俺の指輪見て、眼が『キュピーン』ってなったもん。
んで、なんかマッドな笑みを浮かべてるし。

「ところで・・・」
「ん？」
「我等の封印を解いたのはおまえか？」
「ん～、半分正解」
「半分？」
「うん。・・・ゼス！」
『・・・・・・』

・・・まだなんか考えてんのか？
いい加減、戻ってきても良いんじゃないのか？
・・・今度はこいつの近くで。

「ゼス！！」
『うっひゃい！？』

なんだその驚き方は。
一瞬萌えてしまったぜ。美人サンなのに。
・・・萌えるのに美人もクソもねーか。

「封印といたぞ」
『あ、え？・・・お久しぶりですね、魔王達よ』
『・・・・・・』シラー

おいいいいいいいい・・・。
さっきあんな声だしといていきなり威厳たっぷりに話しても、意味ないでしょうが。
現に魔王達、メッチャ白い目で見てきてるけど。
どうすんのよ、これ。

「で？もう半分はゼクリウスのことかの？」
「う、うん、そうだけど」
「なるほど。じゃあ、私達の封印が解けたのも納得でき・・・ないわね」
「ああ、その通りだ。なぜなら、封印を解くためには俺等以上の魔力が必要だ」
「ん～、いくらゼクリウスと言っても、僕たち４人よりは魔力は少ないし」
「かといって、そっちの坊やの魔力は無いにも等しいし」

む。
また、俺の悪口言われた。
しょうがない。

また指輪を外すかな。

『いえ、フラロエの言っていることは正しいですよ？』
「え？本当？でも、魔力がほとんど感じられないわよ？」
『それはイッセーが魔力を隠しているからですよ』
「隠している？どうやって？」
『・・・イッセー』
「おk、まかせろ」

ゼスの呼びかけにこたえて、指輪を外す。
なんとなくゼスが『外せ』と言っているように聞こえたから。

そして、俺の体から溢れ出す膨大な魔力。
その量はこの場にいるイッセー以外の魔力を足しても足りないぐらい。

そして、また指輪を嵌める。

「ふむ、正直ここまでとはおもわなんだ」
「そうね。驚いたわ」
「実に興味深い」
「わぁ～、すごいすごーい！」

どうやらわかってくれたらしい。
つか、なんでゼスは魔王達の封印を解いたんだ？

『ああ、それは今わかりますよ』
（そうなのか？）
『ええ』

じゃあ、大人しくしてよう。

『ところで魔王達よ』
「む？」
『貴方たちこれからどうします？』
「どうするもこうするも、ねぇ？」
「そうだな。どうもできないな」
「みんな僕達が死んだとと思ってるかもしれないねー」
『・・・では、良く宛ては無いと言うことでよろしいですか？』
「そうじゃな。今頃戻っても、要らぬ混乱を招くだけじゃしな」

『・・・じゃあ、私達と一緒に来ませんか？』
『・・・・・・は？』（俺と魔王達）

・・・・・・・・・・
・・・・・・・
・・・

『えええええええぇぇぇぇぇぇ～～～～～～～！！！！！！』

なんでそー、なるのっ！
もうわけわかんないぜ！

・・・また騒がしくなりそうだ。

魔王は眷属？（後書き）

またまた変な終わり方・・・。

ふぅ、疲れた。

あ、あとゼスの本名を「ゼウス」から「ゼクリウス」に変更しました。

タイムマシンは反則道具！（前書き）

お久しぶりぶりぶりの叩き～♪

・・・すいません、ちょっと頭痛くておかしくなってました。

タイムマシンは反則道具！

Ｔｏｄａｙ　ａｎｄ　Ａ・Ｐ：７月２４日　午後
Ｓｉｄｅ：イッセー

おっす。
あの後、結局魔王サマ達も一緒に来ることになって、さらに賑やかになり若干あきれている一誠だ。

『プルテミン神殿』に行く以外予定が決まっていなかった俺たちは、とりあえず俺の家に帰ることになった。
そのときに出したドラ〇もん印の『タイムマシン』を空間から引っ張り出したら

「今どこから出したんだい？後それは何かね？イッセー君」

とシャハパさんが聞いてきたので

「えっと、次元と次元の空間から『タイムマシン』を取り出したんだ」
「・・・ほぅ。・・・ということは、未来から来たのか・・・？」

俺が素直に答えた後、シャハパさんが眼鏡を上げながらそう呟いた。
あ、ちなみに魔王サマ達は今指輪形態になっていて、俺の右手に『魔封じの指輪』・『サーゼクスの指輪』・『アスモデウスの指輪』が嵌めてあり、左手に『レヴィアタンの指輪』・『ベルゼブブの指輪』が嵌めてある。

右手　　左手

親人中薬小　親人中薬小

魔ルア　レベ
封シス　ヴル
じフモ　ィゼ
ァデ　アブ
ーウ　タブ
ス　ン

こんな感じ。後首にはゼスがいる。

指輪の形だけど
サーゼクス　：基本色が黒で、両脇に向かって金の角が伸びている。
レヴィアタン：基本色が白で、赤と青のラインが交差するように入っている。
ベルゼブブ　：基本色が銀・・・というより、もはや髑髏ですね、はい。
アスモデウス：基本色が金で、悪魔の翼？の飾りが施してある。

ちなみにゼスは十字架に天使の翼をつけた感じ。

“普通じゃない”指輪といったが、決してカッコ悪いわけではない。
むしろ俺はカッコいいと思っている。
見たとき心の中で『デビルカッケェ～！』と思ったのは仕方がないと思う。
別に普通である主人公が異常な幼なじみに振り回される漫画に出てくる主人公の真似ではない。
そこらへん分かってくれよな。

と、話が逸れたな。

とりあえず『タイムマシン』で俺の家に帰ったわけだが、

「過去に行くまえに確認した時間と変わってない・・・」ｏｒｚ

『？？？』

そう、時間が経ってない。

つまり、未来や過去に行って暇を潰すことはできない。

何でこんな簡単なことを考えなかったか不思議になるくらい考えなかった。

未来に行ってそのまま過ごそうにも、未来にも今の俺とは違う俺がいる。

・・・軽く詰んでね？

『それでしたら、修行なんてして暇を潰したり、現代の天界や魔界に行ってみてはどうでしょう？』

「・・・それだっ！」

それだよ！

ナイスアイディアだ！ゼス！

『それはよかったです』

よし、早速・・・

・・・待てよ？

天界とか魔界って勝手に入っていいの？

『そんなの』
「そんなの？」
『ダメに決まっている（のです／のじゃ／のよ／のだ／よ～）』

・・・ｏｈ。
ナンテコッタ。

じゃあ、どうやって入るんだよ？

『そんなの強引に入るに決まってるじゃない』

いやいやいや。
フラロエさん、さすがにそれは――

『まあ、それしかないわな』（イッセーとフラロエ以外）

おいいいいいいいいいい。
結局そうなるんかいっ！

・・・まあ、良いけど。

じゃ、とりあえず２９日まで能力把握とか修行とかして暇を潰すか。
と、いうことで、だ。
皆さん手伝ってくれますか？

『あたり前田のクラッカー！』

古っ！

Ｔｏｄａｙ　ａｎｄ　Ａ・Ｐ：７月２８日　午後
Ｓｉｄｅ：イッセー

おっす。

本日２回目の挨拶だな。
つっても、あれから４日ほど経っているわけだが。

この４日間、何をしていたかだって？
そんなの、魔力使ってあそ・・・修行したり、俺の特殊能力調べたり、赤龍帝と話してみたり。
あ、赤龍帝とゼス達はただならぬ関係があるらしく、険悪なムードになったので

「皆仲良く、な？」

と、後ろに『百式〇音』を出しながら言ってやった。
ものすごい勢いで首を縦に振っているゼス達は面白かった。
ドライグ（赤龍帝）の唾を呑む音も聞こえた。
『百式〇音』は『念能力』だから使うことができた。
もう、俺のチート能力には脱帽します。

とと、話が逸れたな。
何の話してたんだっけ？

・・・そう、そうだ。
この４日間何をしていたかだ。
修行って言ったが“制御”のほうが正しいかもしれない。
だって、魔力を物質化して飛ばしたり操ったりするだけだぜ？
まあ、楽しかったから良いけど。

あ、それと、俺の能力がかなり増えた。
めんどくさいし、字数稼ぎとか言われそうだから、書かないけどな。
ざっと５０はあるんじゃないか？
アニメネタに走り過ぎた気もしないでもない。
とあるシリーズとか知ってるだけ試したしな。
「神の右腕」とか「一方通行」とか反則過ぎて笑った。

ゼス達も

『・・・ないわ～。なにコレ？勝てるやついんの？たぶん全世界（天界・魔界も含む）に喧嘩売っても勝てるんじゃね？』

と、真顔でいっていた。

神様や魔王達にここまで言わせる俺って・・・。

これぞ『人外』って感じだな。

『そんなこと言ったら、まともな人外さんに失礼だと思います』

え？

それは俺が人外よりひどいってこと？

『まあ、単純な戦闘力では神でさえ軽く超えてますからね。どこに神を超える人間がいますか』

・・・うん、まあ、そうだな。

人外にも程があるな。

全国の人外さん、ごめんなさい。

・・・最後締まらねーな。

タイムマシンは反則道具！（後書き）

ぼ・う・そ・う♪

もはや爆走。

キャラ紹介（前書き）

とりあえずいつかやんないといけないから
今やります！

キャラ紹介

えー

今回はキャラ紹介です。

そうです。「キャラ紹介する時期がおかしい」と定評がある作者です。

今回ははやめにやっと来ます。

「これではやめとかマジ吉（笑）」とかはやめてください。

名前：兵藤　一誠

歳　：１２

能力：『２次元の能力を使える程度の能力』

『妄想したことがが現実になる程度の能力』

『スーパーベジタブル（サイヤ）人になれる程度の能力』

『特定の人物の能力がわかる程度の能力』

『赤龍帝の力を操る程度の能力』

『武器や道具を作れる程度の能力』

など等・・・

性格：前世の記憶がよみがえるまでは、ただ何所にでもいるやんちゃな子供。

（よみがえり前）少し・・・かなりおっぱいに興味がある。いつも

元気いっぱい、友達と遊んでいた。
（よみがえり後）前世の記憶がある所為か、どこか大人びた雰囲気をかもし出している。常に冷静を保てるように頑張っているが、元は子供。予想外なことがおきたとき、いろいろと元に戻る。
容姿：原作と同じ

名前：ゼクリウス・バーミルクルーテン・プルテノン
歳　：ひ、秘密・・・みたい・・・です・・・ガク
能力：色々ある
（例）あらゆるものに力を与える
性格：礼儀正しい。髪の色が黒ならまさに大和撫子。意外にどじっ子。
容姿：金髪、白磁器のような肌、落ち着いた顔つき、グラマーお姉さん。髪はストレート。今後、一誠の要望で・・・。でも、服はちゃんと着てるよ？

名前：リーヒイロ・ルシファー
歳　：千を超えてから数えていないらしく不明
能力：破壊の魔力を操る。
性格：古いしきたりとかに囚われたような頑固爺・・・ではなく、ある程度、いや、かなり物事に理解を示してくれる好々爺。自ら前線に立ち、敵を蹴散らしていたらしい。
容姿：ただのイケメソ。メッチャ華奢。細い。銀髪。
名前の由来
サイサイ・シーの前任者＋仮面のあの人のライバル？

名前：フラロエ・レヴィアタン

歳　：ひ・み・つ♪
能力：切断の魔力を操る。
性格：これぞエロいお姉さん！って感じの性格。全国のボン・キュ・ボンなお姉さんが好きな大きなお友達が興奮し過ぎて死ぬであろうことが予想されるくらいど真ん中。
容姿：黒髪、褐色、ボン・キュ・ボン！露出度が高い服を着ており、偶にポロリするかも？一誠だけには困るくらいオープン。つまりエロい。偶に裸。
名前の由来
コバヤシさん家の奥さん＋修正してやるぅを兄と慕っていた紫髪＋プルプルプルプル！

名前：シャハパ・ベルゼブブ
歳　：１２５６３歳
能力：吸収の魔力を操る。
性格：マッドサイエンティスト。この一言に限る。この言葉以上に似合う言葉がない。
容姿：どこぞの根暗科学者。白衣を常に来ていて、隈は友達。紫髪。
名前の由来
謀った人＋吐き出せ！と言われた人＋カトンボ！の人

名前：クスジール・アスモデウス
歳　：覚えてない！ニコニコ　らしい
能力：沈黙の魔力を操る。
性格：純粋無垢だと思われているが、実はかなりの策士。いつもニコニコしているのは、相手を油断させるためと、友達を作りたいから。結構なさびしがりや。
容姿：一見細く見えるが、極限まで絞った筋肉で全身ができている。

幼い感じの美少年。茶髪。
名前の由来
月は見えるか？と確認しないと必殺技が使えないＭＳ＋ソロモンに
帰ってきた人のＭＡ

以上

おっぱいおっぱい（前書き）

年明け前に全部頑張る！

今回のは読まなくても支障はないです。

おっぱいおっぱい

Ｔｏｄａｙ　ａｎｄ　Ａ・Ｐ：７月３０日　午前
Ｓｉｄｅ：イッセー

おっす。
この世のおっぱいはオレのもの！こと、イッセーだ。
やっぱりおっぱいは全人類の宝だね！
いや、女性そのものが宝だ！

・・・さて、なぜオレがこんなことを言い出したか。
気になる人も気にならない人もとりあえず落ち着いてオレの話を聞いてくれ。

・・・なに？
今のお前よりは確実に落ち着いてる自信がある、だと？

・・・うん、そうだね。なんかごめん。
昨日あまりにも興奮し過ぎて、なんかおかしくなってた。

昨日は７月２９日。
つまり俺はニーディパークに行ってきたわけだ。
パーク全体の感想を一言で言えば『面白かった』だ。

特に面白かったのが、あの『天国　ｏｒ　地獄』って言うジェットコースター。
上っているときは正に『このまま天国に行くんじゃね？』と言うぐらい上る。
そして、頂上から一気に下へ“落ちる”。

そう、“降りる”じゃなくて、“落ちる”なのだ。
落ちた当初は比喩ではなく、車輪がレールから離れていた。
下に落ちるにつれて、レールは少しづつ曲がっていっており、中盤あたりでやっと車輪がレールに戻った。その後、勢いが衰えないうちに5連ちゃんコークスクリュー。
修行ではもっとすごいことしてたから、俺は純粋に楽しめた。
だが、母さんと父さんは顔を青くしてトイレに入っていった。何でだろうか？

その後いろんなアトラクションを楽しんだ。
『本物！？お化け屋敷』
『ホーンとテッドのマンション』
『バズ！ライト！いやあああああああ！』
『恐怖のコーヒーカップ』
『カナダの海賊』
ｅｔｃ・・・。

どれもこれも意外性が高く面白かった。
お昼は『ＥＧＧ』と言うところで食べた。
店名から大体予想はついていたが、卵料理ばっかりだった。卵好きで良かった。

そしてここからが本題だ。
このパークの中央部分には、巨大な噴水がある。
そこには毎年、夏になると何千人という人が集まるり、泳いだり足を入れたりする。

・・・そう、“泳いだり”するのだ。
これがどういう意味かわかるか？
そう、そうだ！

つまり、皆水着だってことだよ！

AA	7．5
A	10
B	12．5
C	15
D	17．5
E	20
F	22．5
G	25

これがなんだかわかるだろうか？
勘のいい人はもう気づいているかもしれないな。

そう、アルファベットは『カップ数』で数字はそのカップ数での『トップとアンダーの差』をあらわしている。
法則としては、Aカップの“10”を基準とし、2．5増えるにつれカップ数が1あがるとなっている。
逆に2．5減るとAA、そしてここからは1cmずつ減るにつれAA－・・・となる。

そして、話は戻る。
水着ということは当然、トップとアンダーがどれくらいかわかるというわけで、さらに、俺の目はもはや人外以上と化しているわけで・・・。

つまり、俺にかかればトップとアンダーの差が何cmで何カップかというのもわかるということだ。
ゆくゆくは服の上からでもわかるように修行するつもりだ。

噴水で泳ぐ人の中には貧乳から巨乳まで『何でも御座れ』だ。
俺はどちらが良いとか悪いとかを決めることはできない。
どちらにも長所と短所があるとわかっているからである。
だから俺はあえて言う。

「美乳こそが至高であると！」
『・・・もぅ、イッセーたら／／／』
『まーたいきなり変なこと言い出したぞ～』
『ふむ、しかしなかなかどうして、興味深い理論だ』
『うむ、その意見には激しく賛同せざるを得ないのじゃ』
『あらあら、お姉さんのおっぱいのことかしら』
（（（否定できないからなんともいえない））））

・・・魔王達もバカである。

話は戻して。

別に『美乳』に逃げているわけではない。
これだけ言っておく。
どのおっぱいがいいなんて、人それぞれだ。自分は自分、他人は他人。所詮最後に決めるのは自分しかいない。そして俺は貧乳も巨乳も知っている。だから俺にとって大きさなぞ、二の次だ。大事なことは、そのおっぱいの性能だ。

張り・弾力・丸み・色・乳輪・乳首・感度・肌触り・艶・重量。

この項目すべてが自分の好みに値する。
それこそが至高・・・つまり、パーフェクトおっぱいなのだ！
大きさなんてただの飾りですよ！童貞にはそれがわからんのです！
と、言いたくなってくる。

・・・まあ、俺も童貞だけど、前世は相当なヤリヤリだったらしい。
そこから導き出した答えが『美乳』。

生憎と、その噴水に俺の求めるおっぱいはあったかもしれないが、
見つけることが不可能だった。
丸みをクリアしているおっぱいはいっぱいあったが、弾力や感度な
どのほかの項目は確認の仕様がないので、今回は諦めた。
駄菓子菓子！
もとい、だがしかし！
俺は諦めない！
いつか俺の求めるおっぱいと会うために！

「いざ行かん！美乳を求めて！」
『『『おお～～！！』』』
『『ばかばっか・・・』』（（イッセーにはわたしがいる［のです
／じゃない］））

・・・やはり最後は締まらない。

おっぱいおっぱい（後書き）

カップ数のところは作者のあやふやな記憶なので明確にわかる人がいたら教えてください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2136z/

俺とアニメと妄想と

2011年12月31日16時57分発行